

茅野市総合教育会議 会議録

1. 日 時 令和6年3月13日(水) 開 会 午後 4時00分
閉 会 午後 5時30分
2. 会 場 ゆいわーく1階 101・102 会議室
3. 出席者 市長 今井 敦 教育長 山田 利幸
職務代理者 矢島 喜久雄 教育委員 若御子 雅英
教育委員 竹村 節子 教育委員 伊藤 美奈
出席職員 こども部長 五味 正 生涯学習部長 上田 佳秋
企画部長 田中 裕之 企画課長 井出 弘
こども課長 阿部 香織 幼児教育課長 笹岡 俊江
学校教育課長 渡辺 雄一 生涯学習課長 竹内こずえ
文化財課長 小池 岳史 スポーツ健康課長 河西 茂廣
教育総務係長 春日 雅彦 教育総務係主事 小池 智也
4. 傍聴者 1名

茅野市総合教育会議次第

令和6年3月13日（水）午後4時00分
ゆいわーく1階 101・102会議室

1 開 会

2 あいさつ

3 議 事

(1) これからのまちづくりと教育

(2) その他

5 閉 会

○学校教育課長

定刻になりましたので、これから茅野市総合教育会議を開催します。
本会議は、茅野市総合教育会議運営要綱6条に基づきまして、公開としたいと思います。
初めに、今井市長ご挨拶をお願いします。

○今井市長

今日は大変お忙しいところ、お集まりをいただきありがとうございます。
現在、子どもたちを取り巻く環境は、大きく変化してきています。そんなことを踏まえて、この後、自由にディスカッションできればと思います。
4月に入ると、永明小・中学校校舎の引っ越しが完了して、小学生と中学生が1つの施設で学ぶ施設一体型での学びが始まります。
地域の人だけでなく、茅野市中の人に協力していただきこの学校ができていますので、大事に感謝して使ってほしいお話を機会があるとさせていただいています。財政的にも決して楽ではない状況の中で、皆さんが、作ってあげなければいけない。と思ってくれるからこそできるものです。今後も、小学校の統廃合の話は出ていますが、どういう形であれ、学校は建て直しや補修は必要ですので、みんなで支えていく体制作りをしているところです。
とにかく、子どもたちが安心して、親御さんが安心して学校に通わせることができる状況を、作るために皆さんに様々な角度からご意見をいただければと思います。 以上です。

○学校教育課長

議事に入る前に資料の第6次茅野市総合計画基本構想についてですが、特段、これに沿った形でお話を進めるのではなく、今後の茅野市が目指すべき姿を示してある構想案ですので、参考程度にご覧ください。
この後の議事進行については、今井市長に進めていただきます。

○今井市長

様々な角度からご意見をいただければと思います。
テーマとしては、これからのまちづくりと教育とさせていただいています。
資料の第6次茅野市総合計画基本構想は策定の途中ですが、現在のスケジュール感でいくと6月議会定例会にお諮りをして、正式にこの計画に基づいて動く形になります。
大きなキャッチフレーズとして「幸せを実現できるまち」としています。これは、市がしてあげるのではなく、個々が努力をしていく中で幸せを実現していくことを目標としています。
それを実現するための1つの力として「交流」ということが書かれていて、これは、地域内の交流と地域外と地域内の交流、さらに「“知”の(CHINO)交流」、インターネットや仮想空間での交流を含めた3つの交流を原動力にしていくことが書かれています。
具体的に申し上げますと、交流の場所は、駅の周辺、蓼科湖周辺、そして白樺湖周辺を想定していて、実際に交流の動きが始まっています。
駅前では、ベルビアの再活性化に向けて次世代の茅野市を背負ってほしい方たちに考えてもらっています。そのために市も本気で応援しています。
蓼科湖でも同じように若い世代が活動してくれて、蓼科BASEや8Peaksなどができてきています。
白樺湖も同じように支援を行い、大きな廃屋を財産区の皆様のご理解をいただく中で、撤去していき、その土地の今後について議論を行っている状況です。
このように、若い人たちの意見をどれだけ政策に取り入れていくのかが今後の茅野市の発展

を左右してくるだろうと考えています。

そのため様々な分野の若い人たちとの交流、ディスカッションを大切にして、彼らが思い描いている市の形を我々もバックアップする形を見せなければいけないと思います。

その前段で、若い人たちがこの地で学び、経験をして将来茅野市のために力を貸してくれる人たちが現れてくれることが皆様の願いではないのかと思います。

以上のようなことを踏まえて、ディスカッションしていければと思います。

まずは、皆様順番に発言をお願いします。

○矢島委員

今、市長より語られた「交流」ということで、若者のお話をされました。

私は過日、公民館の分館職員研修会に参加する機会がありました。

そこで、次のような挨拶をさせてもらいました。今井市長は、交流によるまちづくりを提唱しています。地域の交流を生み出す力を、公民館役員の皆さんは持っています。皆さんの意欲と努力で交流を生み出し、人と人とをつないで欲しいと願います。と訴えてきました。

今、コロナが過ぎ、交流をキーワードにさせていただいたのは、まさに大切な所を狙っていたのだと思います。今こそ、先ほど若者という話もありましたが、若者を初めコロナで分断された人との繋がりを再構築するような活動を広めていきたいと思っています。

○若御子委員

先日、私が感じたところをお話しさせていただくと、私は小学校6年生の娘がいますが、先日、娘にベルビアに連れて行ってほしいと言われて、なぜ行きたいのか聞いたところ、6年生の総合学習でベルビアの現状と今後というテーマで学習しているので、ベルビアの写真を撮りたい。ということで、娘と2人で行ってきました。

改めてベルビアの中を、何年かぶりに散策をして、2階のコワーキングスペースの辺りは大分にぎやかでしたが、他スペースはだいぶ寂しい状態でした。

また、ベルビアの現状も大事ですが、娘の小学校の学習でそういったテーマで、ベルビアをどうしたらいいのか考えるような授業をすること自体が、自分が小学生のころにはそのような事は一切考えたことが無かったので、すごいことだと感じました。

このような学習を通して、将来茅野市に残って貢献したいと考える人が増えるような気がしました。

○伊藤委員

交流ということで、私事ですが、私の住んでいる穴山には、公民館に図書館がありますが、コロナ禍で人の出入りがほとんどなくなってしまいました。

私は地区の図書部員をしていることもあり、どうにかして、子どもたちに多く利用してほしいと思い、個人的にイベントを開催しようかなと思っています。誰かが主体的に動かないと停滞してしまうと思うので、交流ということでやってみようかなと感じました。

○竹村委員

私は今回英語教育についてです。

英語教育については、様々な意見がありますが、個人的には子どもたちが生き生きと学習しているとは思えなくて、他市町村に目を向けると独自の英語教育を取り入れているところもあります。

そこで、茅野市でも、独自の英語教育を取り入れるのはどうでしょうか。

例えば、さいたま市では、英語の統一したカリキュラム「グローバルカリキュラム」を導入して、授業時間を大幅に増やし英語に触れる時間を多くしたことによって、英語検定の合格率が大幅に増えているようです。

他にも、人口約2万人の茨城県の境町では、英語に特化まちづくりを目指しながら人口増加も図るようにフィリピン人講師の常駐やALTの配置増、英語検定の受験費用に無償化等を実施していました。

ただ、茅野市ではこの二つとは全く違うやり方をするべきだと思います。

私の案は、交流ということに掛け、心温まる交流のための「伝わる英語」を目指して幼保小中高、高齢者までの一貫教育を実施すればいいと思います。

今までは、学習の場面でしか捉えていないので英語自体を避ける傾向にある人は沢山いますが、英語をスポーツとしてとらえ、英語脳を鍛えることによって、子どもたちの生きる力の道具の一つとなるシステムを組めば人口増も見込めると思います。

スポーツとしてとらえることの大切さを感じたのは、日本語には無いフォニックスや発音、発生方法を日々の生活の中で訓練し、ネイティブな英語をしゃべるための基礎を学ぶことができ、将来英語を学びたいと思った際の助けとなると思ったからです。

高齢者についても、発音の練習は口腔ケアにもつながるところがあり、口腔ケアにさらなる意味を見出すことができるのでは、と考えました。若い世代と高齢者が英語を通して交流に繋がる可能性も感じています。

また、実際に、この学習方法を取り入れる場合、注意しなければいけないことが、段階的に目標を決めて学習する必要があるということです。単語や発音を日常的に学ぶ中で、自分がどの程度実践的な英語を喋ることができるのかを1つ1つ確認してスキルアップしていくことが英語の基礎を学ぶ上では非常に大切な要素になってきます。

茅野市内に住むすべての人が、国内さらに海外の方にまで茅野市の魅力や誇りを説明できるような光景が私の理想です。

○市長

いただいた話を大きく分けると、交流という大枠があり、その中に英語、図書館の運営などがあつたかなと思いますが、交流というもので、矢島委員からお話をいただきましたが、ポストコロナ禍であればこそ、積極的に活動していかなければならないと思います。

様々な交流があつて、茅野市全域の大きなサークルで行われているものや、例えば伊藤委員のお話したような、穴山なら穴山だけの交流がありますが、その中で子どもたちも交流を様々な形でやってくれていると思います。

そうした中で、主体的に動くということがすごく大事だと思っています。やはり先生に言われたようにやるのではなくて、自分たちで考えて、意見出しあつて提言しようとなることは非常に良い形だと思います。

交流というのは、そこに人が集まっているのではなくて、そこから何か起こるということを期待していますので、ぜひ伊藤委員にはまず公民館の図書館に人を集める事を主体的に取り組んでほしいと思います。

参考事例として、ベルビアの中では、まちなかライブラリーという個人が本を持ち寄つた図書館をやっています。日本全国にライブラリーはありますが、形態は様々ですので、図書館に行つて話を聞くことで、穴山に合つたやり方もあるかと思います。そして、その活動を行う中で、区内の他の組織などとも交流の輪ができて、よりよい区になっていけば良いと思います。

今、市内には、様々な活動をされている方がいますが、だんだんと待ちの姿勢になってしまい、市に言われたから活動するという団体も少なくありません。

やはり、市民が主体的に動くことが大切だと思います。市としても地元の人やそこに集う人たちの願いをできる限り応援する形が望ましく、市が願う形になってしまえば、あまりよくないと思います。

茅野市の団体には主体的に動く力は十分にあると思います。公民館活動を例にとればまさしく主体的な活動と言えます。

○矢島委員

今、市民が主体的にというお話いただきましたが、まさにそれをやっていたらいいなと思います。

市長は、冒頭で若者に期待をかけていると言っていました。私は、高齢者にも大きな期待をかけています。私は、大沢地区に住んでいますが、「大沢の宝」つなげ隊という活動をしていて、活動に声をかけると出てきてくれる人々と、地域の古いものを大事にしたり、埋もれてしまったような宝を発掘したり、それを保存して、発信していくような活動をしています。

昨年、金鶏金山は有名ですが、大沢にも金を掘った後があるということで、先輩が連れていってくれて、とても古い穴そのまま残っていました。

そのままにすれば埋もれてしまうようなものも大事に保管、保全にして発信していく中で、子どもたちが地域に興味を持ってくれることを期待して頑張っています。

○市長

正直申し上げて、団塊の世代の人たちがまだ頑張ってくれているから、世の中のいろいろな仕事が回っている部分があります。

定年が65歳まで延びて、多くの人が70歳くらいまでは働く時代になってきているとは言っても、あと何年、その人たちに甘えていられるだろうかという状況だと思っています。

だからこそ、そうした世代から、金山の場所もそうですが、交流を通して若い世代が学んでいくべきだと思います。

市で画一的に指示を出すのではなく、地域、地区で考え、作り上げ、守っていくことが集まって大きな交流、良い交流に繋がると思います。

例えば、地域の歴史について活動している団体と英語について活動している団体が年に数度集まって一緒に発表したり苦労話を共有したりする場面を作ることが大切だと思います。

茅野市として一つの枠組みに属していながら、自分の地域、自分の専門以外のことについては意外と知らないことも多いです。そこを交流の中で知っていくことが、今後の茅野市にとって大切なことなのかもしれません。

このことについて、若御子委員の意見はどうか。

○若御子委員

交流といった時に、若者というところで理科大生との交流がまだまだ足りないのかなと思います。

先日、会合で理科大の先生と情報交換をして、理科大の現状を話し合いましたが、その話を聞く限り、公立化されて以前よりも優秀な人が集まってきていて、さらに入学志願者数も今増えてきているとのことでした。ただ、今年は減りました。と言っていました。

せっかく志願者が増えつつあったのに、減ってしまうのは、人口が減少しているという根本的な問題もありますが、大学周辺をはじめとした茅野市のロコミを見て受験者減につながっている部分もあると思います。これも以前も聞いた話ですが、理科大生は、バイトの働き口が無

いので、松本あたりまで行ったり、そもそも住んでいたりという学生も多くいました。

先ほど話にあった茅野市の魅力という点についても、大学生にとっても魅力的なまちづくりができれば結果として人口の増加につながるのかなと感じました。

○今井市長

現実には厳しく、ここに住んでいる人たちは、茅野市はこんなにも豊かな自然があるのできっと気に入ってくれるはずだ。と思うのですが、若い人たち学生さんたちは、決してそれだけでは、この地を選んでくれないということが現実です。

だからこそ、都会のようにお店や施設を沢山作ることは難しいけれど、茅野市の良さを発信していくことは大切だと思います。

さらに、学生がこのまちと関わる機会を作っていくことも解決策の一つになると思います。

先日、ベルビアのコワーキングスペースの前あたりで、国土交通省の事業で3Dマップの上に茅野市を持っている地図データをオープンデータとして見える化する「i-都市再生」という事業で、理科大生、東海大諏訪の高校生から60代の一般の方まで参加して「どんな情報がデータ化されていたら便利なのか」ということについて、数グループに分かれて意見を出し合いました。

内容として非常に面白く、このようなイベントにもっと学生を参加させていくことで、学生も楽しみながら、市としては若者の意見を聞き取ることができました。そしてその輪の中にもっと多くの学生、企業、団体が関わることで、より深い交流となり、茅野市に貢献しようとする学生も出てくるかもしれません。

伊藤委員はどう思われますか。

○伊藤委員

若者の主体性も重要ですが、年を重ねるにつれて、外から来た人の受け入れについて否定的になっていっている気がします。

コロナ禍もあり市内への移住者も増えてきている印象ですが、受け入れ側の意識も大切画と思いました。

○竹村委員

伊藤委員が主体的に活動しようとする原動力は何ですか。

○伊藤委員

1つは、毎年新刊を入れているのに、誰も見てくれないもったいなさです。

もう1つは、今の若い人たちは、忙しすぎて交流どころではなくなっている気がします。そこで、月に2回くらいはせっかくなので新刊を読むこと契機に交流できればと考えて活動を予定しています。

○竹村委員

根底には、大きな地元愛があると思います。

○伊藤委員

地元愛が無いわけではないと思いますが、私は、長年茅野市に住んでいるからこそ、茅野市の魅力やいいところを聞かれた時に都会に住んでいる兄弟ほど答えられません。

確かに、空気がおいしく、ロケーションは良いと思いますが、当たり前になっている部分が

多いため、市外に住まれている方の意見を聞くことも大切だと思います。

○今井市長

外から来た人は、茅野市のポテンシャルを高く評価してくれていますが、地元の人は意外と気づいていない状況です。そこをもう少し磨こうということで、少しずつ変化してきていますが、急激に変化を起こそうとするといろいろ起きてしまうので、塩梅を見ながらやっていこうと思います。

若い人たちが、交流どころではないのも現実で、なかなか地域の事業に出るにしても、世代間での交流について、意識の違いがあってなかなか難しい状況です。

社会教育系の話が続いたので、英語教育の関係で竹村委員何かありますか。

○竹村委員

山田教育長に質問ですが、主体的な子どもを産み育てるうえでの一番大事なことはどんなことだと思われませんか。

○教育長

主体的な教育の話の前に、英語教育の歴史をお話します。

平成29年に学習指導要領で、外国語活動が英語教育へと変わりました。目的は、コミュニケーション能力を養うことにあります。

令和2年に平成29年の学習指導要領完全実施になりました。平成29年から令和2年までの移行期間について、茅野市は、まず英語に慣れるということで、台湾から英語の専門家の秋先生を招聘して、各学校を回って英語を教えていただきました。先生たちが英語に慣れることに重きを置きました。

そのあと、英語の指導主事を、昨年まで配置して、各学校を回って英語の指導をしてきた歴史があります。

そうした中で、英語の発表会であるイングリッシュセッションを県下で、小学生での実施は初めてでしたが、行いました。さらに、コロナ禍で半日となってしまいましたが、イングリッシュデイキャンプなどを実施しました。

来年度は、1日英語の日を設けるイングリッシュデイやパフォーマンステストを実施しようかと考えています。

以上が歴史となります。令和2年の学習指導要領完全実施の時、英語は免許を持っている先生しか原則教えられなくなりましたが、全県で500近い学校がある中で、19人英語教員を配置して、その中で、市内小学校に1人配置がありました。現在は、英語教員が79人いて、諏訪に配置されている英語教員は8人でその中で茅野市に配置されているのは3人です。

英語を主体的に使うということは、自分から話したくなることです。

英語で話さなければならない必要場面が出てくる、または英語の方が便利だとわかることだと思います。

その中で、学校英語だけでは無理なので、イングリッシュセッション、イングリッシュキャンプ、それからパフォーマンステストを節々で入れていますが、それでも、難しい部分もあります。

一番大きいことが、例えば、平成29年に秋先生を呼んできて、1番の目的は、先生たちが英語できるようになるということです。しかし、何とか1年間英語力を鍛えても、3年皆移動してしまい、ゼロからやり直しです。これは、現在も起きている問題です。

さいたま市の場合は、さいたま市で教員を採用しています。そのため、市から教員が流出し

にくい状況です。

もう1つは、竹村委員のような新しい試みに挑戦することは素敵なことですが、いわゆる文科省が示している英語の指導法と違ってきてしまうため特例化しなければならず、そのためには、多くの教員の裏付けが必要となってきます。

来年からのパフォーマンステストやイングリッシュキャンプを行う中で、子どもたちが徐々に変わっていけば良いと思います。さらに、この活動には地域の方の参加も可能かなと思います。

うん。

○竹村委員

CSや公民館活動なども含め、地域の方からの積極的な学校への動きは、学校側は大変でしょうか。

○教育長

私の校長時、地域の方に何人かお手伝いいただきましたが大変ではなかったです。ただし、教えることはできませんので、あくまでもお手伝いをしていただくことになります。

イングリッシュキャンプなどに協力いただければ、交流の輪は広がっていくと思います。

先ほど、矢島先生がおっしゃった高齢者についても、図書館で、今まで子どもの読み聞かせを中心に行ってきましたが、高齢者に対する図書館経営ができていいのかという反省が出てきました。

○市長

教員の異動してしまう関係ですが、ICT教育についても同様の悩みがあります。茅野市は、長野県の中でも先んじていて、タブレットの一人一台配備の通知が出た時には、既に3人に1人がタブレットを持っていました。

さらに、先生たちへの教育にも力を入れて、移行に際して何の問題も無いほどでしたが、数年経てば移動となり、英語教育と同じ問題を抱えています。

○竹村委員

英語教育を活用した高齢者との交流の輪ということで見れば、日本人は他の国、たとえばイタリア、フランス、中国などと比べれば英語を話す難易度ははるかに高いです。これは呼吸法の違いが関係してきますが、これは逆に高齢者の口腔ケアにも繋がると考えます。高齢者と若者が英語を通して繋がりを持つ中で、双方にとってのメリットが生まれる気がします。エリートを育成する英語教育も良いことですが、個人としては、今言ったような繋がりを大事にした英語教育を促進して、さらに、発達障害や配慮が必要な児童・生徒を取り残さない英語教育を目指してほしいと思います。

○市長

誰もが英語である程度意思疎通ができることは、大切なことだと思います。

ここで、永明小中学校が施設一体型となりますが、小中学校で一緒に活動することの効果について検証して、今後どのような教育方針がふさわしいのかを考えていきたいと思っています。

ただ、それだけではなく、5年後も茅野は人口5万5千人維持して、生産年齢人口の55%を目標として掲げています。現状茅野市は、700人亡くなって300人生まれてくるような状態です。5万5千人の人口を維持するためには、この400人を茅野市へ入ってくる人、社会増に頼るしか

ありません。しかし、先ほどお話でもあったように、受け入れる側がいつでも歓迎できるような体制が必要不可欠ですが、伊藤委員もおっしゃったように高齢の方の中にはなかなか負のイメージを払拭できない方もいます。

なので、若者からその意識を持ってもらって、交流を通して地域全体として転入される人々を温かく迎える事ができる素地を作っていくことが大切だと思います。

学校の規模適正化についても言えることですが、地域に学校を残したいのであれば地域の方々も相応の努力をしていただく必要があります。その努力の1つとして先ほど申し上げた受け入れる素地を作ることは繋がってくると思います。

私自身としても、現状の学校数が望ましいですが、今後も人口が減少してしまえば、適性化の議論を本格的にしていかなければいけません。

○矢島委員

先ほど、永明小中学校を見せていただきましたが、当初イメージしていたよりも遥かに小学校と中学校の境界が曖昧になっていて、小学校1年生から中学校3年生まで境が無い教育の中でどんなことが生まれるのかを想像してとても楽しみにになりました。

○今井市長

永明小中学校での学びの姿を、できるだけ多くの人に見ていただきたいと思います。

少人数での教育と永明小中学校のような大人数の教育のそれぞれにメリットがあると思いますので、色々な考え方で交流を持ってより良い学びになればと思います。

最後に皆様から何かあればお願いします。

○矢島委員

今井市長からお話がありましたが、私も、小集団で学ぶことに意義とある程度の集団で学ぶことの意義がそれぞれあると思います。

私の住んでいる金沢小学校では、宮川小学校と比べて、極端に児童数が減っています。このような問題を地域単位で考えていかなければいけないと思っています。

○若御子委員

話の中でたびたび出てきた主体性が一番大事ななと思います。文句を言うことは簡単ですが、せっかくなら主体的に問題の解決方法を考えて活動していくことが大切だと思います。

伊藤委員もおっしゃったことですが、実際住んでいる茅野市の良いところは中々思い浮かばないこともあります。当たり前だと思っていること、例えば特急あずさはすべて茅野駅で停車しますが、これはすごいことです。このような当たり前を見つめなおして、主体的に活動できれば良いと思います。

○伊藤委員

今日のお話をお聞きして、こどもは、学ばなければいけませんが、社会はどんどんと変化していくので、大人ももっと学ばなければいけないなと感じました。

○竹村委員

今日、市長のお話の中でいいなと思ったのは、受け入れる側の心構えを作る。ということです。先ほど永明小中学校を見せていただき、今までにない学校の形態でわくわくしましたが、少し心配になった点は、米沢小学校や下古田地区から入学する生徒です。ただ、そこで、受け

入れる側が学ぶことが大切だなと思いました。

○教育長

最後に明るいニュースを3つご紹介します。

1つは東京都の府中市に26小学校ありますが、13校が茅野市に訪れることになりました。昨年は、北部中学校の生徒が縄文遺産のガイドを行って、このことが今年の交流に繋がったようです。ちょうど20年ぐらい前の生涯学習推進計画の裏の後書きに、茅野駅を降りて子どもに話し掛けたら、「僕縄文のことを知ってるよ。ガイドしてあげるよ。」という小学生を育てたいという記述がありました。その夢に少し近づいたと思います。

2つ目が、先日、調べ学習コンクールで、総務大臣賞をいただき、少し茅野市について紹介をしてきましたが、最後の交流会の席で、私のもとへ来て、茅野市に移住したくなりましたと言っていました。決してお世辞ではなく言っていたのでうれしかったです。

3つ目が、御代田町から、調べ学習コンクールと縄文市民科について一緒にやりたいというお話をいただきました。さらに、調べ学習コンクールについては、茅野市の研修を職員に受けさせてほしいとのお話もいただきました。縄文市民科については、御代田町にあるミュージアムで茅野市とコラボをしたいという話を頂きました。

少しずつですが、交流の輪が広がっています。教育育委員会では、子どもたちを子どもとして扱うのではなく、一市民として捉えています。今後も、継続したいと思います。

ちょうどコロナ禍で、「たくましくやさしい夢のある子ども」というメインテーマのサブとして、「自分の人生、自分たちのまちの未来を思い描く教育」というテーマを付けましたが、まさしく、今後の茅野市の教育に必要な要素だと思います。

以上です。

○今井市長

皆様、本日はごつくばらんに沢山の意見をいただきありがとうございました。

○学校教育課長

今井市長、進行ありがとうございました。

それでは以上をもちまして、総合教育会議を閉じます。

お疲れ様でした。